

口語英語の洗礼

大 村 喜 吉

.....greeted my dear Pacific with uncounted thanks,
for now the long supplication of my youth was answered;
that serene ocean rolled eastwards from me a
thousand leagues of blue.

—Herman Melville, *Moby Dick*

1949（昭和24）年8月24日、水曜日、私は戦后アメリカ向け日本人留学生の第1陣50名の中に入ることができて、アメリカ陸軍輸送船（USAT）Gaffey 号（1万5000トン）に乗船した。乗船するとき各自めいめい Assignment Card と Meal Ticket をもらった。将校と同じ cabin passenger にはせずに、わたしたちはダンブル〔<down below〕と俗に云われる船艙^{そう}に積み込まれた。出発前、吉田茂総理大臣主催の大歓送会で You are, all of you, academic ambassadors. などと激励された留学生たちは、このことにながりの不満をおぼえたが、1949年と云えば日本はまだアメリカ占領下にあったのだから、アメリカとしては日本人に GI 以上の待遇を与えることはできなかったのであろう。そのことを云えば、わたしたちの scholarship（大学院では fellowship）は月75ドルであったが、これは GI Bill of Rights（復員兵援護法）におけるアメリカ兵士が進んで大学に入って勉強するときもらった月75ドルと同額であった。

食堂（mess hall）へ行って、炊事軍曹（mess sergeant）に meal ticket に punch してもらって、GI といっしょに supper を食べる。Carnation という商標の ice cream, salad その他。Cucumber は日本

の方がいい。しかしその量と質には驚かされた。コーヒーはいわゆる American coffee より濃いが、何杯でも飲める。このときコーヒーの army slang word が *mud* で、マカロニは *pipe* であることをおぼえた。Loudspeaker による食事時間集合のことばがおもしろい。Line up for chow. あるいは Chow down. と云う。Chow は第一次世界大戦以前から、英語に入りこんで来たことばだがその語源は中国語である。

Chow, n., army slang for food.

—George Philip Krapp, *A Comprehensive Guide To Good English*

Chow in the slang sense “food” is an Americanism from Chinese Pidgin English *chow-chow*.—Thomas Pyles, *Words And Ways Of American English*

chow n. (sl.) food.—*The Concise Oxford Dictionary* (Sixth Edition edited by J. B. Sykes)

Chow is not listed by the DAE, and NED Supplement traces it no farther back than 1886. It is Pidgin English and was probably brought to the United States by Chinese immigrants at the time of the gold rush, for *chow-chow* (the condiment) is recorded for 1852. *Chow* has never got above the status of slang, but *chow-chow* is in perfectly respectable usage. It reached England by 1857.

—H. L. Mencken, *The American Language* Supplement I

chow slang: Food, Victuals; also: a meal or meal time—*Webster's Third New International Dictionary Unabridged*

この chow が、また同時に日本語の「ちゃぶだい」(食卓)と同語源であることはおもしろい。

8月25日の朝食は8時、Bread に Butter と Jam, Sausage, Poached Egg, Potato. 午後3時、横浜港出航。Military Brass Band が軍楽を吹奏、紙テープが投げられる。午後4時、Boat Drill. 救命胴衣は *life preserver* (ふつう *life jacket* と云う) をつける練習をする。この *life pre-*

server は英国では「(護身用) 仕込み杖」という意味にもなるから、英語はややこしい。

8月26日、朝食は 2 boiled eggs, mashed potatoes, apricot, apple. うで方のせいか、ゆで卵は青黒くなっている。殻 (shell) はくるりとぬける。この日、炊事当番を *kitchen police* (略 KP) ということと「兵舎などを清掃, 整理整頓する」ことを ⁽¹⁾*police up* ということをおぼえた。COD の第6版は《米語》として **police (up)**, clean (barracks etc.) と説明を与えているが、この *police up* は当然アメリカ軍隊用語で、一般には用いられない。この日の midnight に Advance clocks $\frac{1}{2}$ hour という指示が紙片で渡された。なお次のようなことが書かれてあった。

Distance traveled at 12 Noon today—402 miles
 Distance to San Francisco 4319 miles
 Time required for 402 miles was 19 hour, 48 minutes
 Average Speed—20.3 knots

8月27日、この日手渡された Noon Report には次のようなことが記されていた。

| | |
|------------------------|---------------------------|
| Course | 088° |
| Distance | 489 miles |
| Latitude | 35° 42.5' N |
| Longitude | 157° 24' E |
| Length of Day | 23.5 hours |
| Steaming Time | 1 day 19 hours 18 minutes |
| From Yokohama | 891 miles |
| To San Francisco | 3830 miles |
| Average Speed per hour | 20.8 knots |
| Air Temperature | 82° |

(1) *Police vt 3*: to make clean and put in order (as a military camp)—often used with *up*—*Webster's Third New International Dictionary*

| | |
|-------------------|-------|
| Water Temperature | 78° |
| Barometer | 30.24 |
| Wind | S. E. |

この日の midnight に Advance clocks 30 minutes という指示があった。ある GI から「空の青い色」は light blue で、「海の青い色」は royal blue だと教わったが、一般のアメリカ人がこのように使い分けているか、どうかは疑問だと思われる。さかんに Londspeaker が All KP's! Report to the Sergeant Major's Office. とさけぶ。もちろん repor to ～ は「出頭せよ」という意味である。ここに Sergeant Major というのは下士官最上位の階級で、Master Sergeant or First Sergeant (米陸軍で Top sergeant とか top kick と云う) より上の位^{くらい}だが、なぜかアメリカ陸軍の下士官の表にはふつう Master Sergeant or First Sergeant—Technical Sergeant—Staff Sergeant—Sergeant と並記してあって、Sergeant Major が出て来ないものが多い。こんなことはどうでもいいことだが、やはり気になる。

8月28日 Advance clocks 1 hour tonight.——の指示が来る。

| | |
|---------------------------|----------------------------|
| Course | 87° |
| Distance | 485 miles |
| Latitude | 35° 59' N |
| Longitude | 167° 19.5' E |
| Lenght of Day | 23.5 hours |
| Steaming Time | 2 days 18 hours 48 minutes |
| Distance from Yokohama | 1376 miles |
| Distance to San Francisco | 3345 miles |
| Average Speed | 20.6 knots per hour |
| Air Temperature | 80° |
| Water Temperature | 78° |
| Wind | N. N. E. Force 2 |

Force 2——は Windforce 2。普通用いられている wind scale (風力階級) は Beaufort scale で、0 から 11 までである。Force 2 は light breeze (軽風)、木の葉がゆれる程度。

8月29日 There will be no time change tonight. と云う通報が来た。8月30日に the international date line (国際日付変更線) を通過した。9月3日、遂に San Francisco に pull in した。多くの GI がいっせいに Frisco! Frisco! とさけぶので、ついつりこまれて私も Frisco! と声をあげると、GI の中にも教養のある兵隊さんもいるもので、Frisco などという俗なことばは使わない方がいい、と私に教えてくれた。いたずらに文語的な表現をしゃべることがよい、とは言えないが、またアメリカ人が使うからといって、slang を、得意げに用いることは、あまり感心したことはない、とそのとき反省したことを今でもおぼえている。Immigration Officer が入って来て、passport は6ヵ月毎に更新することなど注意してくれたほかに Alien Head Tax は \$8 であったので、アメリカでは Aliens are worth only \$8 などというつまらないしゃれがあった、などと教えてくれた。MP に Landing Card を渡して、タラップ (gangway) を下りた。ここで \$ 27.50 受け取って、近くの cafeteria で lunch を食べた。Deviled⁽²⁾ egg 20 cents, coffee 10 cents, sales tax を入れて、31 cents 払った。現在のアメリカでは10セントのコーヒーなどはあるまい。動詞 devil は料理用語で「(こしょうなど強い香辛料をきかせて) あぶり焼きする——研究社新英和大辞典」ことで Krapp の *A Comprehensive Guide To Good English* にも The words **devil**, v., and *deviled*, adj., as terms in cookery are in general good use. と出ている。もちろん英国でも用いられることばで COD は *devil* v. 2. v.

(2) **devil** vb 2: to chop (food) fine and mix with hot seasoning or sauce usu. after cooking——now usu. used as a past participle <a tasty ~ ed crab> <~ ed eggs>——*Webster's Third New International Dictionary*

t. Cook with peppery condiments. と簡単に説明している。The Overland Route で Chicago に行くことになった。汽車を利用して、始めてアメリカの駅（地下鉄は別であるが）に日本のような（プラット）ホームがない，ということに気付いた。ではどうしてお客さんが汽車や列車に乗り込むかと云えば，footstool（踏台）を使用する。Webster 大辞典 *platform* *n* の 2 の *f*: に an elevated ledge or shelf (as of a machine or freight station) used esp for the reception or transfer of materials と説明しているので分かるように，さすがに貨物駅にはホームがある。貨物は自分で乗り降りできないからで，辞典も丹念子細に読んでいくと，色々と物事の詳しい事情が分かって，おもしろい。だから「(駅の) 入場券」を *platform ticket*⁽³⁾ というのはイギリス英語である。またアメリカの鉄道は改札制ではなくて，検札制であると言ってよい。私の乗ったシカゴ経由ニューヨーク行きの大陸横断鉄道（New York まで3,168マイル，84時間）はその頃のもっとも速い鉄道だが，San Francisco（桑港——日系一世の人はソーコー，ソーコーと云う）から対岸の Oakland に出る，ここから豊饒な Sacramento 平野を過ぎ，Salt Lake City を経て，Ogden 市に達し，さらに Wyoming 州に入り，Cheyenne（シャイエーン）市に到着する。この地方より Nebraska 州 Omaha 市を通して Illinois 州 Chicago に着く。Ogden では chair car (a railroad passenger car having pairs of chairs with individually adjustable backs on each side of the aisle——Webster) に乗っていたのだが，黒人のボーイ（アメリカの俗語で George と云う）が時々袋をもってごみを拾いにやって来て，仲良くなった。しかしシカゴで下車するまで接触したアメリカ人は限られていたから，この間に口語英語の洗礼を受けたと

(3) **platform ticket** *n*, *Brit*: a ticket authorizing a person not himself traveling to go on the restricted platform at which trains arrive and depart (as to meet or speed a traveler)——*Webster's Third New International Dictionary*

は言えない。ただ列車の掲示その他を見て、これを読んだにすぎない。ここにその二、三を記しておこう。

Do not flush toilet while Train is standing at a station.

No double decking.

Please close top cover before flushing toilet.

Passengers are requested not to flush toilet when Train is passing through towns and cities.

Passengers must keep off the platforms⁽⁴⁾ and steps of all cars until the train stops.

シカゴからコネティカット大学へ

^{そうこう}桑港 (San Francisco) からすでに情報が来ていたものと見えて、シカゴ (「チコーゴー」とか「チカーゴー」と発音するアメリカ人もいるが、まねをしない方がよい、と土地の人が教えてくれた) では日系一世、二世、それに Baptist 派 Christian の social worker である Miss Esther Davis さんたちの歓迎を受けた。Japanese American の経営する Wisteria Restaurant (藤の屋——という意味であろう) で御馳走になり、そろそろこのときあたりから口語英語の洗礼をあびはじめた。Davis さんはシカゴのどまん中で、私に「あなたは either をどう発音しますか、[í:ðə] ですか、それとも [áiðə] ですか」などとたずねて、私を大いに喜ばせてくれた。この^{かた}方とは帰国するまでに、再度お会いする機会に恵まれたが、ただのいちどでも私にむかってキリスト教の話をしたことがない。最後のお別れするとき、有名な聖書学者 James Moffatt の *A New Translation Of The Bible Containing The Old And New Testaments* を私にくださった。この本は私が大学で「聖書の英語」を講義するとき、どれほど助けてもらったか分らない。現在では絶版である。June 16, 1950

(4) **platform n. 3** 《米》客車後部の乗降口、デッキ (vestibule)——研究社新英和大辞典 第5版

——私が日本に向ってシカゴをたつとき、Davis さんは私を自分のマンションにつれていかれたが、部屋に入って、ふと見ると mantelpiece の上に亡くなった御主人の写真が置いてあった。御主人はアメリカ海軍士官で、1941年12月7日（日本では8日）、日本海軍の真珠湾奇襲のとき戦死された方であった。

第1回のシカゴ研修でおぼえたことばは、その時はめずらしかったからすぐ pick up しただけで、現在の日本からみたらつまらないものが多い。例えばクレープゴムを靴底に用いた *crepe-soled shoes* とか *fluorescent lamp*（蛍光灯）、*nylons*（婦人用ナイロン靴下）、ride on the *L*（高架鉄道）、etc., etc. また *elbow grease*⁽⁵⁾（humorous and slang for *vigorous muscular application*——Krapp）などはおもしろい表現とは思いますが、とてもそれを自分の身につけて活用できることばではない。

克明に日記をつけるという習慣を持ったことのない私はシカゴをいつ立ったかよくおぼえていない。ただ鉄道で目的地である Connecticut 大学に到着すべく、Willimantic という町の駅で降りたことと、一日に2回しかバスの往復がなく、ついたときはすでに最終バスには間に合わなかった、ということ、さらに Nisei の George Yamamoto が学生部長の命を受けて、自動車を出迎えてくれたことを記憶している。たしか 8 September, 1949 であった。この晩は教員宿舎に泊めてもらった。この時ここにいられた大学の若手の講師、助手の方たちがお互いにしゃべっている英語に、そのままぶつかって、あまりにも分からないので驚くとともに、自分の英語の Hearing の力がかくも低いのか、とがっかりした。シカゴでは私の英語力に合わせて英語をしゃべってくれたのか、それともこの東部 New England の英語の方が、日本にいたとき、大ざっぱにイギリス英語に近いものだと、一方的に思いこんでいたのが悪かったのか、とにかく

(5) **elbow grease** *n.* 《戯言》激しくこすること；大変な骨折り：bestow a lot of ~ on a work ある仕事に大いに骨を折る——研究社新英和大辞典 第5版

えらく失望落胆したことを、今でも、記憶している。どうやら私の口語英語との悪戦苦闘はこの日から始まったと言ってよい。

9月9日、学生部長⁽⁶⁾の Johnson 氏に会ったら、いきなり You did pretty well. (よくやった) とほめられた。どの地図にもものっていないような寒村 Storrs に、この University of Connecticut は立っているからである。大学院の寮に案内されて、寮長(この州立コネティカット大学では proctor と云うが、これはアメリカの大学によって違う)に「便所はどこにありますか」と云うことを Where is the head? ときいたら、「よく head などということばを知っているね」とほめられた。これは船の中で物知りのアメリカ陸軍の兵隊さんから、海軍では便所は head、陸軍では latrine と云うのだと教えられたので、ちょっと使ったまでだった。「便所」を head と云うのは海軍用語とは限らないようである。現に大 Webster にも **head** *n* 15 **b**: a ship's toilet——と出ている。因に「便所」は「よっぱらう」「死ぬ」などと共にその euphemism が実に豊富である。汽車でシカゴまで来る間に見た掲示では、*Men* とか *Women* とのみあるものがいちばん多かった。男子用便所 (men's public lavatory) の掲示が *Gentlemen*, 女性用便所 (women's public lavatory) の掲示が *Ladies* となっているのはイギリスだけで、アメリカでは私は見たことがない。いちばんよい便所の婉曲語は *rest room* である。これは、もちろん、公衆便所のことで、家庭にある便所は *lavatory* でも *toilet* でもよい。かつて日本でよく用いられた *W. C.*, *water closet*⁽⁷⁾ は正しい英語で、現在でも廃語になったわけではないが、婉曲語とはならない。男子用の寝間着で *nightshirt* は one-piece で、*pajamas* (*pyjamas* と

(6) 男子学生部長を the dean of men, 女子学生部長を the dean of women と云う。

(7) **water-closet**, *n.*, avoided in polite conversation and replaced by some euphemistic substitute, such as *bathroom*, *toilet*, *convenience*, *comfort station*. —G. P. Krapp, *A Comprehensive Guide To Good English*

綴る) は pants [trousers] がついている。

13 Sept, '49. この日私の口語英語修行のために、この上もない幸運がおとずれた。コネティカット大学農学部卒で Nisei の Fred K. Yamaguchi (山口一雄) さんが、わざわざ大学へ来て、自分の自動車で New York につれていってくださった。この日は雨 (wet)。New York では Fred のおじいさん、おばあさんに当る^{ふちがみ}淵上御夫婦が Nursery Company を経営されていた。数時間かかって、その大きな農場のある Cedar Lane, Ozone Park, Long Island, N. Y. の家についた。このあと数日にわたって、*hectic* ⁽⁸⁾ day の展開となった。私が Fred に、大学院での専門の勉強もいいが、まず perfect speaking の力を身につけたいから、遠慮容赦なく私をきたえてくれ、と頼んだからである。そこで Fred の私に対する猛烈な特訓 (briefing) が開始された。この Kazuo 君は most interesting type to study の Nisei で、お父さんの山口さん (その頃はすでに亡くなっていた) がなかなかの知識人で、戦前もいいところ、Kazuo がまだおさないとき、コロンビア大学留学中であった竹中治郎先生に、とくべつに委嘱されて、日本語と日本文化の勉強をさせたと云われる。竹中先生との結び付きは、おそらく教会 (淵上、山口家も Presbyterian 派の Christian, 竹中先生も Presbyterian Church に属し、牧師の資格も持っていた) を介してのものであったろう。さらにまた淵上さんの故郷は、北九州福岡、山口家の郷里は広島、そんな郷土性も入っていたのかもしれない。

Fred の特別訓練は、まず Windsor knot (necktie の結び方の一種) から始まり「手のおき方」(Relax せよ)「肩のあげ方」「歩き方」(いわゆる「正常歩」をおぼえろ、あなたは歩いていない、You *shamble* ⁽⁹⁾ とお

(8) *hectic* *a.* 2. (colloq.) exciting, feverishy active—COD

(9) *shamble* *v* to walk awkwardly, dragging the feet—*Longman Dictionary of Contemporary English*

こられた), 「胸を出して, 腹を引っこめろ」「万年筆をポケットにはさむな」 etc., etc. その頃, 日本ではポマードをべとべとにつけて, 髪を複雑なかつこうにするのを Regent style などと云っていたが, Fred は「それは yogore style」だと笑った。「よごれ」とは, Fred によると, 二世の異称で, 白人アメリカ人がつけたあだなである。ほかに *Buddha head*, *Bitchy* (?) などがある。たしかに, YMCA, recreational facility のある bowling alley あたりにたむろしている二世の頭をみたら, この yogore style であった。私の目には, smart set どころか, まるで「ぐれん隊」にうつった。

発音の訓練は, まことに猛烈で, まず *Friday* を発音せよ, から始まった, なんと発音しても落第。すこしく業腹になった私は -r- は発せずに, まるで「ファイディ」のように言ったら, 「それだ, その要領」とはじめて合格した。これを nonsense word でやらされるとさらにむずかしい。例えば *ra ra ra ra ra*, とりわけそのあとで, *la la la la la* の練習をさせられると, まいってしまう。ここですこしく日本における英語教育の歴史を回顧してみよう。大正から昭和にかけて, 英語の発音に関する bible とまでなった Daniel Jones の著作 *An Outline Of English Phonetics* (初版1918, 改定9版1960) で, 著者 Jones は *Japanese Mispronunciations* という項目をもうけ, その中で **l** と **r** を出しているのはよいが, l 音の困難を強調しすぎている。その影響もあってか, 日本の昔の英語教師は r 音がいかにむずかしいかということを教えなかった, あるいは知らなかった。

次が円唇 (lip rounding) をともなう **u** と **w**。例えば *woman*, *wood*, *woo*, *wool*, *wolf* を発音してみろ, と言われると, その理屈は知っているのだが, やはり落第してしまう。Fred が *park* の発音を, California の人と New York の人とで, 使い分けて発音して, 「ちがいが分るか」ときかれたときも, カリフォルニアは General American で, retroflex

(そり舌音), ニューヨークはそれがない, ということは知っているのだが, 私の耳はそれを完全にとらえられなかった。そのときはほんとうに嫌になってしまった。

時にはおもしろいこともあった。Fred が「津波」は英語でなんと言うか, とときくから *tidal wave* と答えると, No. そこで *seismic wave* か, と云うとまた No. それでは *shock wave* か, と云うとまた No. 「ではなんと云うのだ」と私がきくと, 「津波」は英語でも *tsunami* が正しいと答えた。もっとも「柿」なども *persimmon* よりも *kaki*, 「日本みかん」も, *mandarin (orange)* とか *tangerine* などと云うよりも, むしろ *satsuma orange* の方が本当だ, と教わった。これは私が日本に帰って来てから, 東京教育大学農学部の pomology (果実学) 担当教授にたずねたら, その通りだという返事であった。

アメリカ人だって迷信家はある。Fred は外国人の御^ご弊^{へい}を担^{かつ}ぐ点をいくつか, あげてくれた。

1. 塩をこぼす (spill salt) と縁起が悪い。だから塩壺をテーブルの上にひっくりかえさないようにしなければいけない。
2. はしご (ladder) の下を通るな。
3. 黒ねこ (black cat) は, 悪魔を表わしたという昔の迷信から, 縁起が悪い。
4. 一本のマッチで3人以上, タバコに火をつけると, 人が死ぬと云う。
5. 口ふき (table napkin ; serviette⁽¹⁰⁾) は, 御馳走になりに行ったときは, 使用したあとたたまずにもどすこと。その気持ちは “I will come back to fold.” (またたたみに参ります) と云うこと。

(10) *serviette*, n., *table napkin*. The word is not in general use, pertaining chiefly to the language of waiters and servants, the customary word being *napkin*.—Krapp, *A Comprehensive Guide To Good English*

6. 13⁽¹¹⁾ という数はさけること。とりわけお客さんを招待するときは、13人は招かないこと。

7. 昔から help sorrow と云われているから塩は外人に取ってあげないこと、ただし塩壺を pass することはさしつかえない。

8. Knife は cross させないこと。「争い」を意味して、喜ばれないから。

この Fred のお姉さんがふたりいて、一番上の Sumiko さん（この方が私を Willimantic 駅で迎えてくれた George Yamamoto の奥さん）はそれほどでもなかったが、Fred のすぐ上のお姉さんの Michiko さん（御主人 Dan Kawasaki はアメリカ陸軍将校として、日本へ進駐して、情報関係の仕事をしていたが、仕事の内容に関してはいっさいしゃべらなかった）が、さかんに私の英語のおしゃべりにたいして、Oh, yeah?⁽¹²⁾ を連発する。日本の辞典の説明がまちがっているというのではないが、この Oh, yeah? はべつに懐疑心を表わすというのではなく、ただこう受け答えるのがスマートだと思われていた。社会心理学者 Britt は次のように説明している。

At one time you were socially acceptable by glibly replying to any remark, "Oh, ye-a-h?" with rising inflection. —Steuart Henderson Britt, *Social Psychology of Modern Life*, p. 299.

この yeah の発音表記で、日本の辞典にのっているものはいささか眉唾物である。大 Webster の *any of the vowel-final pronunciations at Yes* という説明がいちばん正しい。がんらいこの yes の変種、変形はア

(11) これは the thirteen superstition で、もちろんキリストの Last Supper で 12人の弟子とキリストで13人いた、ということからである。ホテルの部屋でも13号室はない。しかし13日の金曜日にも飛行機は飛んでいる。

(12) ちかごろのアメリカではかなり衰えたが、私のいたころはその流行の真只中、oh, Yeah? ええそうかい《懐疑心を表わす言葉》——研究社新英和辞典 第5版

メリカ英語研究（単語篇）の中でもおもしろい。H. L. Menchen はその *The American Language* (1947 Alfred A. Knopf New York) p. 353 で次のように書いている。

In *yes* the terminal consonant is often omitted, leaving the vowel, which is that of *desk*, unchanged. This form is sometimes represented in frint by *yeah*, which suggests *yay* and is inaccurate. But there are many other forms of *yes*, and Dr. Louise Pound once gathered no less than 37 in a single group of students at the University of Nebraska. (Popular Variants of *Yes, American Speech*, Dec., 1926)

Fred がよくつかったことばに *phony* [or *phoney*] がある。これは名詞にも、形容詞にも用いる。戦前から日本の英和辞典にのっていたのだが、わたしたち若い英語教師は知らなかった。私が Fred の家にいたころ、アメリカでもテレビはめずらしいほうで、まだあまり普及していなかった。そのテレビで commercial が始まると Fred はきまって a lot of *phony*⁽¹³⁾ と云う。メンケンもその *The American Language* (p. 187) で Today, anything not genuine is *phoney* in the common American speech, and a person suspected of false pretenses is a *phoney*. と言っている (1947年版)。

Phoney とともに derogatory (軽蔑的) なことばである *lousy* も、どんなときアメリカ人が使うのかを自分の耳できくと実によく分かる。これらの言葉は、私がアメリカを去った翌年 (1951) に出た、J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* で、一躍して50年代ハイティーンの用語として定着し、圧倒的な人気を呼んだ。私のいた当時その名声の高かった作

(13) 現在では米語とは限らない。 **phoney, phony**, 1. *a. & n.* (sl.) *a.* Sham, counterfeit; fictitious; fraudulent. 2. *n.* Phoney person or thing. —COD (Sixth Edition)

品は、Norman Mailer の *The Naked and the Dead* (1948) と Robert Penn Warren の *All the King's Men* (1946) であったが、これらの著作は私の口語英語との悪戦苦闘記には直接関係はない。

私の髪の毛が一本抜け落ちる、すかさず Fred は *A hair came*——あとは何んと云うのだ、とたたみかける。もちろん正解は *off* で、うっかり *out* ととでもいようものなら、おしかりをうける。日本みかんの皮がくるりとむけるのも *Its skin comes off easily*. しまいには、さすがの私もいやになってしまう。すると Fred は “You are improving. *Buck up!*” と激励してくれる。あるいは話題をかえて、私の家にテレビがある、隣りの人がまけるものかと無理して買う、こういうのを *keep up with the Joneses* ⁽¹⁴⁾ と云うのだとか、日本では食事の前に「いただきます」と云う言い方があるが、アメリカにはない、ただアメリカの陸軍では *dig in* と云う、などと教えてくれる。この *dig in* ⁽¹⁵⁾ は、しかし、軍隊用語とは限らないようである。なお「食べ始める」には *fall to* という表現があるが、現在でも口語英語として用いられているのであろうか。Fred の日本語は *Nisei* として非常にうまい方だが、それでも「そう云いますのよ」などという。ほほえましくなる。このとき、私の友達で、日本語の得意なアメリカ人が、「そうだもの」と得意気に云うのを思い出した。そうかと思うと Fred は私に「広島ではフグをフクと云う人もいます」などと教えてくれる。私は広島のことばに暗い。ほんとうにそうなのだろうか。ことばというものはむずかしい。

(14) **keep up with the Joneses** to stay level with social changes; compete with one's neighbours socially.—*Longman Dictionary Of Contemporary English*

(15) **dig in** (colloq.) begin eating—COD **dig in** *vi* 3 **b**: to begin eating—Webster

コネティカット大学

21 Sept, '49. 大学の授業が始まった。余談ではあるが、Connecticut という地名は、語源はアメリカインディアン語で「うねりくねる」(winding) ということだと、ある大学院の学生が教えてくれた。もっとも大 Webster 辞典には《原義》at the long tidal river——と出ている。大学のキャンパスで会う仲間の学生のあいさつことばがきわめておもしろい。*Howdy! How you been?* (元来 *How have you been?* であろうが、これが *Howbeen!* と聞こえる) *How's life? How is it going? How's everything?* いちばんおどろいたのは、同じ大学院の寮に住んでいる学生が朝、キャンパスで私に会うと、*What do you know?* と云う。つまり、この表現は、「何かニュースあるかね」からおきたものであろう。勢い込んで、明瞭に発音しないで、ものぐさげにゆっくりと云う。日本人だって「よう」「やあ」「どうかね」などと云うではないか。しかし、発音は、やはり苦手だ。gold が「ゴー」に聞こえる。いったい、ことばの途中にくる 1 音は要注意だ。その前後の発音にくるいが出る。例えば silver は「スーヴァー」に聞こえる。学校が始まった 9 月 21 日、*So what?*⁽¹⁶⁾ をどのような situation で云うのか、ということをおぼえた。相手のことばを受けて、「でそれで、だからどうした」という意味だが、どんな風に使うかをおぼえなければならない。9 月になって、すでにすぎ去った 8 月は *this August* か *last August* か、ちょっとまよってしまう。実験室を [ləbórətri] と発音して、[ləbərətò:ri] と直される。Sir Walter Raleigh の Raleigh を [ró:li] と発音して、[ráeli] に、*The Grapes of Wrath* の Wrath は [ró:θ] ではなく、[ráeθ], *luxury* は [lákʃri] で

(16) 西脇順三郎先生が口語英語のおもしろさとむずかしさの例によくひかれる表現。
so what? *infml* Why is that important? Why should I care?—*Longman Dictionary Of Contemporary English*

はだめで、[lágzri], *exit* は [éksit] を [égzit] に、正されてしまった。そうかと思うと、生粋のヤンキーの Tilley 教授などは、アメリカ文学史の時間に、*capitalist* や *capitalism* と云う語を、それぞれ [kəpítəlist], [kəpítəlizm] と発音した。これはイギリス風の発音をわざとまねて、英国風をからかっているのである。この先生は Thomas Hardy を引用するのに、Thomas Hardy, *foreign* writer——と云う。なにも *foreign* とことわらなくてもよいではないか。発音のことを云えば、「ロールシャッハテスト」を [rórʃa:k] と云わずに、ついドイツ音で発音したら、通じなかった。モリエール (Molière) も「モリヤー」、フローベル (Flaubert) も「フローベヤ」、*antiromantic movement* の *anti-* をアメリカ式に [æntai] と教授が発音するから、ついでに h をつけて hantai と云ってくれれば、日本語の「反対」と同じになるのに、とひとりではくそ笑んだり、*semi-* という接頭辞を [sémai] とアメリカ人の先生が云えば、なにが「せまい (狭い)」のかと、とんでもないことを連想したりする。最初の6ヵ月ぐらいの講義は、その内容を理解することがむずかしい。自然科学や、英語学（これはかなり自然科学的方法をとるから）は別として、文学はいちばんむずかしい。もっとも「アメリカ教育入門」を聞いたが、これはよく分かった。その内容を私はよく知っていたからである。ことば（発音をふくめて）の問題よりも、内容の理解⁽¹⁷⁾がいちばん大切だということをおぼえていたのかもしれない。それにしても大学院で（テキストは René Welleck & Austin Warren, *Theory Of Literature*）ソネット形式をやらされたとき、New Criticism のストールマン教授（*Theory of Modern Fiction*）の下でフォークナーの *The Sound and the Fury*, *As I Lay Dying* を読まされたときは、正直に告白して、音を上げた、

(17) むかし西田幾多郎先生が「私ははじめギリシャ哲学が分からなかったのはギリシャ語の知識の不足からだと思った。その後相手の哲学者の「思想の核」にふれて、よく分かるようになった」と云われたのは至言である。

と云わざるをえない。

その頃の救いは、寮に帰ってきてからの院生同志の自由奔放な、いわゆる *bull session*⁽¹⁸⁾ であった。知手を論破せんとして用いる、尾籠な *interjection* の *bull shit, chicken shit, horse shit* などを今でもなつかしく思い起こす。話題は政治・経済・宗教から文学・芸術一般に至るまで、おおよそそのすべてにわたった。ここから私の得た利得はこれをはかることができない。院生のひとりが私にきく、「アメリカになにににに来た」と、そこで私は低姿勢に出て、「Democracy in action を学びに来た」と答える。「まちがったところへ来たものだ。アメリカほど *most undemocratic country* はない」、それに力を得て、私は自分の目でたしかめた *discrimination* を攻撃した。するとその学生は私に「では日本の同和はどうなんだ」と切りかえす。最初、私は「童話」のことを云ったのかと思った。昭和24、5年にすでに「同和」を知っているのだから、アメリカ大学の大学院の学生はおそるべきものだと言えよう。私がまたアメリカの *machine age* を批判すると、「科学は詩を殺さないで、かえって新しい材料を提供している。夜明けと日没のニューヨークを見よ。E. M. Forster も *Science may enlarge the novel, by giving it fresh subject matter.*」と云っているのではないかと切り返してくる。この *bull session* でも、こと口語英語となると、てんで議論にならない。いちど「出て失せろ」というとき、日本でものの本から暗記していた *skidoo* と *vamoose* を用いて、相手を降参させようとした。彼は、「おれのおじいさんやおばあさんが使ったようなことば使うな」と笑って云った。現代では *Beat it!*⁽¹⁹⁾ *Scram!*⁽²⁰⁾

(18) *bull session* *n*: an informal discursive group discussion <evening *bull sessions* where the talk moved roughly from women to foot ball and back again> — *Webster's Third New International Dictionary*

(19) アメリカ英語とは限らない。Beat it! *sl* Go away at once! — *Longman Dictionary Of Contemporary English*

(20) *scram* *sl* to get away fast; run away: You're not wanted here, so *scram!* — *ditto*.

と云うのだそうだ。

大学の学部学生の食堂 (Main Dining Hall) をあだなで *Beanery* とよぶ。これは、ただ「安くてまずい料理」を食べさせる所というだけではなくて、かの有名な the Depression (1929 年以降のアメリカ経済不況) で豆しか食べられなかったことを忘れないために、そう云うのだとある仲間の学生が説明してくれたが、果してそうなのだろうか。キャンパスで気付いたことだが、アメリカの学生 (18, 9 歳) に若禿が多い。日本では「台湾坊主」(禿頭病, alopecia) にでもかからないかぎりまずないことだが、これは食べ物のせいであろうか、靴をいつもはいているのに私の痼疾の「水虫」(athlete's foot) が出ない。これも食べ物のせいかな、あるいは日本のように湿気のない、かわいた気候のためであろうか。日本では職人さんがよくやったものだが、「耳のうしろに鉛筆をはさむ」(stick a pencil behind one's ear) 癖がアメリカの若い男女学生にあるのは、彼等が自分の部屋で勉強しているときなどによく見受けられた。アメリカ人に左きき (left-handed) の人が多いという印象を受けるのは、初等教育で左ききの人はそのままにしておいて、あえてまちがった矯正をしないからであろう。これは最近の日本でも同じことが云える。アメリカの男女学生といっしょにドライブして気付いたことを一つ。しばしば *Gas station*⁽²⁾ の前に来ると、別にガス欠でもないのに車をとめる。これは gas station には必ず便所があるから、仲間 (特に女性) にそこへ行く機会を与えるように気を利かすのである。

今ではあまりはやらないが、その頃の日本の男性は pomade をよくつけた。アメリカ人はこれがきらいで、Its smell is too strong. と云う。では日本人の髪になにがよいか、ときいたら Vaseline hair tonic を使えと云われた。Vaseline は trademark で、そのアメリカ人は [væzə-

(2) **Gas station** *n* AmE Filling Station—*Longman Dictionary Of Contemporary English*

li:n] と発音した。なおこの人は *suave* (=pleasing, bland) gentleman の *suave* を [swá:v] と云ったが, [sweiv] という発音しか知らなかった私はちょっとおどろいた。H. C. Wyld の *Universal Dictionary* (1932) でも G. P. Krapp の *A Comprehensive Guide To Good English* (1927) でも, [sweiv] をみとめているが, Daniel Jones の *English Pronouncing Dictionary* (1963) を引いてみたら, [old-fashioned sweiv] となっていた。発音は, でたらめでいいとは云わないが, 場所により, 時代による変化もあるから, あまりこだわらないほうがよいようである。現に大 Webster 辞典 (1967) は [væzəlɪ:n] を認めているのに, アメリカにおけるもっとも Standard な Kenyon & Knott の *A Pronouncing Dictionary Of American English* (1944) はこの発音を出していない。

時代による変化と云えば, このときおぼえたアメリカの会計年度 (*fiscal year*, イギリスでは *financial year*) がある。私の第一回の留学のときは July 1—June 30 であったが, アメリカは 1977 年度から, 7 月開始を 10 月から翌年の 9 月までに改めてしまった。これを知ったのは *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary* (Fifth Edition 1980) が出版されてからである。

11月23日は第4木曜日で Thanksgiving Day. この日に George Yamamoto の自動車で Fred の家につれていってもらった。この日までに出会った, いささかおもしろいと思われる口語英語の表現をここにあげておきたい。

This meets in this room.

(この講義はこの教室でやる)

Take it easy.⁽²²⁾ (分かれるときに云う, なお *So long.*⁽²³⁾ *I'll see you.*

(22) 元来は「ゆっくりやろう」, これはむかしアメリカの工場で事故が多発するので, その安全対策として catchphrase を公募したとき当選したことば, これが

Bye-bye.⁽²⁴⁾ *Ta-ta.*)

You can *tell* an Italian by *his breath*.

(イタリヤ人はニンニクを食べるから、その息で分かる)

No man must speak but in *whispers*.

(図書館ではひそひそばなしで、普通の声で話すことはできない)

I *am catching up*. (遅れをとりもどそうと猛勉強中)

The color will *run*. I don't guarantee.

(色がぬける、保証しませんよ)

Technically speaking, (私が *Strictly speaking* と云うと、いつもこう直された、ただしその理由は説明してくれなかった)

He is *dapper* [*spruce*].

(おしゃれ)

Thanks a lot. — *You bet.*⁽²⁵⁾

(ありがとう。いや、どういたしまして)

Go *get*⁽²⁶⁾ your laundry.

(洗濯物を取りに行きなさい、出来ているから)

How *are you making out*?

(やあ、どうかね—会ったときのあいさつ)

New York 再訪問

11月23日、この日 George Yamamoto が来て New York 行き、淵上さん、山口さんの家で、コロンビア大学に再度勉強に来られた明治学院大学教授の竹中治郎先生にお会いすることができた。先生はニューヨークへ来られる途中、汽車の中で、アメリカにいる友人の住所を書きこんである *address book* をとられてしまったとのこと。このころから *un-American activities* 調査がきびしくなって来たようである。Fred は相変ら

大流行となり、色々の場合に用いられた。

(23) *So long*, phrase, colloquial interjection at parting, *good-by*.—Krapp

(24) *bye-bye*, *interj.*, colloquial, puerile, and playful for *good-by*.—Krapp

(25) これは現在のアメリカでも用いられている、口語あるいは俗語、親しい間では *You are welcome*. はあまり用いない。

(26) *Go and get* ~, *Go to get* ~ はイギリス英語風。

ずいろいろなことを教えてくれる。たとえばアメリカの先生が眼鏡の bow (縁) をなめたり, lapel (折り襟) を hold したり, pipe をつき出して, 学生に Now, you——などと質問をするくせ (アメリカの学部学生は禁煙だが, 先生はタバコをすう人もいる。大学院では先生も学生もタバコをすうことが許されている) をデスチャーまじりで demonstrate してくれる。泥靴で部屋に入ろうとすると, うちの「ばばちゃんに You'll get bawled out.⁽²⁷⁾」と大きな声で云う。ついでに云うと, アメリカに slippers は, もちろん, あるが, 山口家には見当らなかった。靴はよくその泥をおとしてから部屋に入る。アメリカ人は種々様々な靴をそろえておいて, これをとりかえる。室内ばきの靴は Loafer とよばれるが, これは元来は trade mark. 小文字で loafer⁽²⁸⁾ と書いてもよいが, いわゆる「つっかけ」で, 昔の帝国陸軍の営内靴に似ている。COD にも出ているが《米語》という意味の印がついている。

Fred のおばあさんの淵上さんはおもしろい。北九州の人だから, 九州弁がときおり飛び出す。「大村さんは戦死しないで, ふがよかと」と云う。「運がよかった」という意味。また「よんべはどこへ行きましたか」と私にたずねる。もちろん「ゆうべ」のこと。一世が日本語のあいだに英語を入れてしゃべるのも, なかなかおもしろい。「そんなこと never しちゃいけない」「でもわたし don't care よ」「してください。right now にね」「グラージ (ガレージ, のこと) にいます」。否定形にさらに英語の never をつけて云うのは, もちろん強意的になるが, いわゆる俗語文法の double negative で, きわめて興味深い。「あの人花屋のくせに, 花など never 持って来ない」。淵上のおばあさんからニューヨークの日系の人だけに通ずる日本語の隠語を教わった。「大村さんは, 九一さんと仲がいい

(27) **bawl** *vt* 2: to reprimand loudly or severely: Rebuke, Reprove, Scold —used with out— *Webster's Third New International Dictionary*

(28) **loafer**, *n.* 2. a casual, moccasinlike, slip-on shoe. —*The Random House Dictionary of the English Language*

ですね」と私にむかって云う。「九一さん」というのは、淵上さんによると、「九たす一は十」で Jew の意味。Fred が使っていたアメリカ人にブルックリン生まれがいたが、この人の発音が、いわゆるブルックリンなまりで、おもしろい。自動車のギヤーを first に入れろと云うとき、「フォイスト！」とどなる。また自動車^をを誘導するとき、「もうちょい^{まえ}前！」は *Pull it up!* 「もうちょい^{あと}後！」は *Pull it back!* ということをおぼえた。

アメリカの大学の行事で、比較的知られていないものに *Hazing*⁽²⁹⁾ がある。もとは上級生の新入生に対する「しごき」であったのが、現在ではセレモニーで、お祭り騒ぎになってしまった。立派な正しい英語で通じないものに *salaried man* と *letter paper* がある。ふつう *office worker* とか *writing paper* [*notepaper, stationery*] と云う。Will you stop by my door? (私の部屋によってくれませんか) は米語法, *Am I supposed to have a slip?* (許可証がなければいけないのですか) は口語用法。R. W. Zandvoort は、その *A Handbook Of English Grammar* (p. 20) で Thus even a schoolboy may say: *We're not supposed* (=allowed) *to play games on Sundays.* と説明している。またおもしろいことがある。テレビの commercial では明かに *Smoke Pall Mall* [pél mél] と云っているのに、このタバコを買うアメリカの学生は May I have *Pall Mall* [pó:l mó:l]? と発音する。ふだんは *Oh, boy! I'm so busy.* (こりゃえらいいそがしい) *He is goofing off.* (どこかで油を売っていて、約束の時間に表われないときなどに云う) *He stinks.* (鼻持ちならないいやな奴だ) とか「便所に行く」ことを *go to the john* などと卑語や俗語を乱発するアメリカ大学の学生が、ひとたび街へ出ると *May I have.....?* などという polite な英語を使うのもおもしろい。これと裏

(29) *haze v AmE* 2 to play tricks on (a young college student) as part of the ceremony of admittance to a club or fraternity.—*Logman Dictionary Of Contemporary English*

腹で、トルーマン大統領は公の場所でも平気で卑語、俗語を用いた。

Fred Yamaguchi の家には三回も *put me up* してもらって、私の口語英語特訓のために *drill sergeant* をやてってもらった。どだい、日本人の留学生が、わずか一年足らずの期間で、口語英語の *perfect speaking* を狙うなどということが、初めから無理な注文であった。日本出発前、鈴木文史朗〔本名は文四郎〕先生にそう云うテーマを頂戴したことは事実であったにせよ、多くの日本人の英語の先生は私を幼稚であったと思うにちがいない。私自身も幼稚であったと思う。しかし事実は事実であって、この私の記述の中では、出来るかぎり、現在の自分自身は入れずに、その頃の33、4歳の私に立ち返って、この私の口語英語との格闘記を書き上げた。

日記をつける習慣を持たなかった私は、1949年のいつまで Fred の家にいて、いつ大学院の寮へもどってきたか、が分からない。ただその頃のアメリカの大学の Christmas Vacation は今よりも短かく、1月2日から授業は始まったから Jan. 2, 50 には大学に帰っていたと思われる。今でも私の記憶に鮮明に残っているのは、1949（昭和24）年11月26日、日系米人の経営していた「大陸商事」という店で、湯川秀樹博士御夫妻にお会いしたこと（先生がこの年の秋、日本ではじめてノーベル物理学賞を受賞されたときは、そのことを知らずに大学院の寮で寝ていた私をたたきおこしたのは、中国人留学生の Halt 氏であった）、明けて1950（昭和25）年、ニューヨークの Fifth Avenue を歩いていたとき、朝永振一郎博士から話しかけられたときのことなどである。湯川先生が私には何を云われたかは忘れてしまったが、朝永先生が「アメリカへ来て、ねむくてたまらない。それにアメリカの学生は数学ができないね」と云われたことは、不思議に私の記憶の中に今でも残っている。

いわゆる Culture shock, それにかかって悶悶の情を、英語で鈴木大拙⁹⁰（本名貞太郎）先生に書き送ったら、先生は英文で色々と諭された最

後に Don't worry about American culture. Go ahead with your work! と一喝をくらった。

(5/5/82)

(30) 先生はその頃南カリフォルニア大学の大学院で仏教哲学を講義されていた。